

太平洋戦争開戦当時の思い出

久留米市 菊竹 正雄

来る8月15日、太平洋戦争が終結し今年で満50周年を迎える。この大きな節目を迎えるに当り、開戦当時の動向をふり返ってみよう。

日華事変が次第に拡大してゆく昭和15年11月、所属する上陸（上海海軍特別陸戦隊）では現役を中心に大移動が発表され、私は軍艦「妙高」に転属することになった。

当時、軍艦「妙高」は呉軍港5番ドックに入渠し、同年3月から第2次改装工事がすすめられており、艦内は連日工廠作業員が大勢出入し、至る所でハンマーの鎚音を響かせ、電気溶接の火花や煙を散らし懸命に作業がすすめられていた。

一方、隣接する4番ドックでは戦艦大和が建造されており、周囲は高さ20mもあろうか、シヨロ縄の網を張って偽装されており、軍人といえども関係者以外の立ち入りは堅く禁止されていた。それほど重要な艦だろうかと思うとつい覗きたくもなり、網の目を通し見て驚いた。かつての戦艦陸奥、長門を遥かに凌ぐ、当時としては世界最大の戦艦の建造であった。

5月に入り、新装整った「妙高」は公試運転、速力、操艦、各種の公試を終え、5戦隊として第2艦隊に復帰した。5戦隊旗艦に返り咲いた「妙高」は、那智、羽黒、水雷戦隊（駆逐艦）と共に、後期艦隊訓練に出動。太平洋を舞台に連日猛訓練に明け暮れる、文字通りの『月月火水木金』の連続であった。

11月上旬、戦技訓練を終了した5戦隊は静かに関門海峡を渡り、母港佐世保に向かう。やがて点在する九十九島の島々を一望し、寺島水道を通過すると東洋一を誇る針尾島の無線塔を右舷に望み、港内へと進む。すると『入港用意』のラッパが威勢よく鳴り響き、乗員達は久しぶりの母校入港を喜び活気溢れるなか、錨が大きな音を立てて投下されると、間もなく『上陸員上陸用意』のラッパが響く。すると上陸員達は嬉々としてカッター、ランチ、内火艇に分乗し第一波止場を目指してゆく。

その後、間もなく『1週間の休暇帰省』が発表され、乗員達は思わぬ朗報に肩を抱き合い欣喜雀躍して喜びあったのであった。そして、休暇帰省の楽しさも瞬くうちに過ぎ、帰還してみると、なんと弾薬が盛んに積みこまれているのである。私は何事が起きたのだろうかと思ったが、誰一人として知る者はいなかった。

その頃、中国大陸では更に奥地へと戦線は拡大し、いつ果てるか分からないありさまだった。一方、太平洋では米国を主体として、A B C D包囲陣をつくり、南方より我国は圧迫される状況下にあった。

11月23日、密かに港内を出て寺島水道に入泊し、海上部隊と合流する。その数、輸送船を含めて40数隻の大部隊となった。

11月24日『臨戦準備発動』（戦争に必要な物資の搭載、演習用、その他の戦争に不必要

物の陸揚げ)及び重油船、食糧船の横づけ補給など、各部隊とも猫の手も借りたい忙しさであった。

1月26日、晩秋の夕日が西に沈もうとする17時15分、旗艦「妙高」(司令官・高木武雄少将座乗)の前檣(マスト)高く、さーっと出航合図の旗流信号が上った。各艦は一斉に「出航用意」のラッパも勇ましく、錨を上げ、密かに九州を後に南進したのである。まさに隠密行動であった。

夕刻総員集合があり、副長竹下宣豊中佐より「我が艦隊は比島攻略部隊として、前進基地パラオ島に向け南進する」との作戦行動が始めて聞かされた。

副長は続いて、「ハワイ攻略の機動部隊は既に先航しており、刻一刻、ハワイ周辺海域に向かって進航中である。またマレー半島への陸軍部隊の揚陸作戦、ウエーキ島、グアム島の攻略作戦などが発動されておる」との概要説明があった。

私は、『日華事変でさえ4年以上も戦い、未だ解決していない状況の中、更に強国である米、英、蘭、豪を相手に戦争ともなればこれは大変なことになるのでは』と思った。

パラオ島を目前にした30日午後、進航前方にスクールが発生し、間もなく「手空き総員スクール浴び方、後甲板」と艦内放送が流れる。すると後部甲板では恵みの天然シャワーで一汗洗い流そうと大勢集まり、裸になって待ちうけたが、生憎く風向きが変わり艦首をかすめ逸れていった。これには皆がっかりさせられた。特に気の早い者は、石鹸を塗って待っていたのに、とんだ「当て外れ」とぼやくありさまだった。

12月1日、待望のパラオ島の内海に入る。するとどこからともなく色黒の現地島民(カナカ族)がカヌーを何艘も漕いで、万歳を叫び、日の丸の小旗を振りながら近づいて来た。乗員達も艦上から帽子を振ってこれに応えたのであった。

12月3日、4日に分かれ『半舷散歩上陸』が許可される。上陸員の殆んどがパラオ島の上陸ははじめてとあって、心は弾み、カッター、ランチ、内火艇に分乗し小島を縫って進む。水深1.0mもあろうか、透きとおる海は綺麗な珊瑚礁が幾重にも広がり、色とりどりの鮮やかな名の知れぬ魚の泳ぐ姿はまるで『龍宮城』を思わせる美しさに魅了された。

コロール島はパラオ本島の西に続く小さな島で、南洋群島を統治する南洋庁の所在地であって、庁舎に隣立する大きな2本の無線塔が空高くそびえ立ち、いかにも我国最南端の守りを備えた重要拠点であった。

上陸員達は常夏の照りつける直射日光を避け、椰子の木陰を散策し、まず「南洋神社」に参拝する。家々の周りにはマンゴやパイナップル、バナナなどの果実が沢山実をつけ、至る所にブーゲンビリアの真っ赤な花が咲きほこり、南国特有の香り漂う風情に心を癒し、帰艦したのである。

12月6日、朝から各分隊出撃準備に多忙を極め、特に兵科ではマンドレット(ハンモックを堅く結んだ防弾用)を重要な箇所に関連して装着するのに懸命。15時総員集合があり、艦長山澄貞次郎大佐の訓示。「いよいよ予定の行動、比島攻撃に向かう」と力強い口調で口火を切

られ、更に艦長は「しかし、米国にありては今なお野村、来栖両大使により戦争回避の外交交渉が続けられておるので、交渉が妥結した場合は、即時作戦を中止し帰投する。もし、決裂した場合は即時、米、英、蘭、豪に対し戦争状態に突入する」との達示があった。乗員達は「いよいよやるか」と戦意を高ぶらす。艦隊は一斉に錨を上げパラオ島を出撃。比島海域を目指す。

12月7日、比島近し。ダバオ港には米国水上機母艦1、重巡1、軽巡2計4隻入港との情報があった。しかし、未だ外交交渉の朗報はなく、「戦争か、平和か」、比島を目前にして艦内は嵐の前の静けさの如く、静かに夜は更けてゆく。

12月8日早朝、総員は「戦闘配置」に就き待機。間もなく「日米交渉決裂」。遂に「太平洋戦争」へと突入したのである。